
銀の放浪老人

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の放浪老人

【Nコード】

N8090X

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

一人の老人が、世界のため、自分の快適な生活のため、可愛い孫を手に入れるために、世界を放浪する物語。

ほぼ会話オンリー、ほぼ毎朝更新、ほぼほのぼのファンタジー、の
ほぼ三つを目標に掲げています。ついでに言っと、ほぼ思いつきで
書いています。クオリティーには自信がありませんが、暇なときの
暇潰しにでも読んでもらえると嬉しいです。

プロローグ

「千、いや、千五百くらいですかねえ」

一人の老人が呟いた。

「そろそろ対処しないとバランスが崩れてしまいそうですね。久しぶりに、旅立つとしますか。ええ、まずは服装ですね、いかにも紳士っぽい感じでいきましょう」

そう言うと、老人は黒いスーツを着て、頭にはシルクハットを、顔にはモノクルを被り、ステッキを持った。

「うーむ、これぞ紳士って感じですねえ。名前は、銀次、でいいでしょう。銀は老人の象徴ですからね。ではギルドでの名は、シルバ、にしましょう」

老人は、適当に名前とギルドでの名を考えると、満足気に頷いた。

この世界では、ほとんどの住人が名前を二つ持っている。一つは親から名付けられる名で、もう一つが自分の職業を決めるときにギルドで登録する名だ。

必ずギルドに登録しないといけないわけではないが、ギルドから発

行されるギルドカードは現代でいうキャッシュカードやクレジットカードの働きをしてくれるので、ほとんどのヒトはギルドに登録している。

ギルドカードがないと、いちいちお金を持ち歩かなければならないため、世界を身一つで放浪する予定の老人には絶対に必要なことだ。

「世界はずいぶん便利になりましたね。私が若い頃はギルドなんて無かったのに。誰が考え出したのでしょうか？」

「まあ、とにかくにも、まずはギルドに向かわなくては」

こうして、銀の放浪老人の旅が始まった。

プロローグ（後書き）

登場人物紹介

銀次（約二百五十歳、人間族）

黒いスーツ、シルクハット、銀のステッキ、モノクルという出で立ちで、本人はこれが紳士の正装だと思っている。
今一番欲しいものは『世界の平和』と『孫』。

殺人鬼との邂逅（前書き）

ほのぼの？

会話オンリー？

……あれ？

殺人鬼との邂逅

「名は、シルバ、ですね。職業は何ですか？」

「職業、ですか？」

ギルドの従業員に尋ねられ、老人は困ってしまつた。

「特にこれといったものが無ければ、適当でいいんですよ。例えば、冒険者、とか？」

老人の様子を見兼ねた従業員は、助け船を出した。

「冒険者！素晴らしい！それに決めます！」

「え、はい。わかりました」

従業員は突然の老人の豹変ぶりに驚きながらも、冷静に対応した。そこは流石プロ、といったところだ。

「はい、手続きは終了しました。こちらがシルバさんのギルドカードです。御受け取り下さい」

「ふむふむ、早いですね、しかし冒険者、ですか。思ってたより俄然やる気が出てきました！」

鼻歌を歌いながら、老人は壁に貼ってある賞金首の手配書を見て、ギルドから去っていった。

「やっぱり殺人鬼ですか。殺人鬼が増えすぎると二百年前みたいになっちゃいますからね。可哀相ですが仕方がありません」

老人は人気の無い森の中で呟いた。

「この近くのはずなんですけど、見つかりませんね。もしもし、殺人鬼さん。いるなら出てきてください。出てきたら飴ちゃんあげますよ」

「なに、それは出てくるしかねえじゃないか」

「ふむ、本当に出てきてくださいましたか。飴ちゃんをどうぞ」

「おう、ありがとな」

バキッ

男は飴を受け取りながら、老人の首にナイフを突き刺した。いや、突き刺したつもりだった。

「な、ナイフが、折れた？」

「今のは、殺そうとしたのですか？それとも、最近流行りの挨拶ですか？」

「殺そうと思ってやったんだよ。今日はまだ誰も殺してないからな。一日一殺が俺のポリシーなんだよ。」

「すみませんが、一週一殺くらいに減らせませんか？煙草の減煙みたいな感じで」

「そんなこと、出来るわけねえだろ！」

叫びながら、男は隠していたナイフを老人に投げ付けた。

「おっとっと、危ない危ない」

老人は持っていたステッキでナイフを弾き、そのまま男の首に突き刺した。

「減煙、いや減殺してくださいなら殺処分するしかないですが、それでも駄目なんですか？」

「一日一殺しねえと、すげえ苦しいんだよ。お前ら人間にはわからねえだろうがな！」

一瞬で首から下が再生した男は、先程弾かれたナイフを拾おうと駆け出した。

だがその努力も虚しく、ステッキで体をバラバラに分解される。いや、分解され続ける。

「はい、最後の一つですよ」

「何が、だ？」

「あなたの命のストックが、ですよ。思ったよりも殺してはいなかったようですね。最近まで殺しを我慢してたのですか？」

「最近までは、な。そのせいで、恋人を殺しちゃったんだ」

「それは可哀相に。今からでも減殺してくださいさるのなら、見逃してあげますよ。殺しを我慢したことのある殺人鬼というものは、珍しいですし」

「いや、もういいんだ。どうせ生きていたって殺しつづけるだけだ

しな。そのステキなステッキで殺してくれよ」

「了解しました。そのステキな駄洒落に敬意を表し、あなたを始末して得た賞金の半分くらいでステキな墓でも建ててあげましょう」

「それはそれはどーも」

老人は苦笑いを浮かべる男の頭にステッキを振り下ろした。

「それにしても、殺しを我慢する殺人鬼、ですか。黒矢少年のことを思い出しますね。彼は今でも正気を保っているのでしょうか？ 気になります、行ってみましょう。お金も手に入りましたし」

殺人鬼との邂逅（後書き）

登場人物紹介

男（二十歳、殺人鬼族）

ヒトを殺さなければ生きていけないはずの殺人鬼には珍しく、最近まで殺しを我慢していた頑張り者。

色々苦しんだりしてたけど、ステキなステッキで殺され、ステキな墓を建てられた。

好きな食べ物ステーキ。

鬼の料理人（前書き）

知り合いが、この世の終わりがきたみたいな表情で言っていました。
「プリンに、プリン体は含まれていない」

あの言葉には、どんな意味が隠されていたのでしょうか？

鬼の料理人

「気配的に、黒矢少年はこの店の中にいると思うのですが、『科学食堂』ですか。なんだかあまり入りたくない店名ですね」

「いらつしやいませ。あれ、もしかして御大老様ですか？」

「はい。大体二百年ぶりですね。しかし、今はその名で呼ばないでください」

「え、じゃあ、なんと呼べばいいんですか？」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次、とお呼び下さい」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、本日はどのような御用件で？」

「本当に呼ぶとは驚きですね。ただ、黒矢君があの時言つてた約束を守れているか、確かめてみようと思つただけです。まあ、大丈夫そうなので安心しましたよ」

「『正当防衛』以外でヒトを殺さない。ですね。最初の方はきつかつたですけど、今はもう大丈夫ですよ。相棒も出来ましたしね」

「相棒とは、奥で何やら怪しい物質を作っている方のことですか？」

「いや、本人いわく、料理ですよ。科学と料理には深い関わりがあるそうです」

「しかし、吸血鬼が料理（？）とは珍しい。それに、かなりの力を感じます。あの方は一体何者なんですか？」

「ただの変人ですよ。変態でもありますが」

「私は変人でも変態でもない。天才だ！」

「うわっ！」

「おつと危ない。大丈夫ですか、黒矢君？」

「大丈夫ですよお爺さん。気絶しているだけ。あつ、さすらいのステッキ職人銀次さんでしたっけ？」

「全然違いますよ。それにしても、黒矢君が気絶するなんて。貴女は一体何者なんですか？」

「ええと、ギルドでの名は、リイレです。ああ、黒矢の知り合いなら名前を覚えておかないといけませんね。吸血鬼の伶俐です」

「伶俐さん、ですか。もしかしてラッドさんの娘さんでは？」

「父を知っているんですか？」

「はい。二百年前の戦争でラッドさんに命を救われたことがあります」

「あのダメ父も誰かの役にたったりしてたんですね。でもステッキ職人さんはどう見ても人間ですよ。失礼します」

「痛い！何をするのですか！」

「いえ、貴重なサンプルとして血液を採取させていただきました。銀次さんの皮膚は並のヒトとは比べ物にならない硬さでしたが、流石はあの武器職人さんの作った注射器ですね」

「なんで吸血鬼が注射器を使うんですか！」

「だって汚いし…」

「そんな！これは、堪えますね」

「うーん、血を見る限り、異常な点は見つかりませんね、って、なっ、泣いている！」

「う、泣いて、なんか、いま、せん。私は、旅人、ですし」

「マジ泣き！ちょっと、黒矢！起きてよ！この状況をなんとかしてよ！」

「う、うん？」

「し、紳士、たるもの、レディ、には、暴力、ふるえま、せんが、君、なら命、ストック、万単位、ありますしね」

ガギッ

「ぐわっ！」

「黒矢！大丈夫？」

「フツ、このナイフが、俺の命を守ってくれたようだぜっ。って、壊れてる！」

「ふむ、命を一つ減らすことも出来ませんでしたね。それにしても、今の攻撃が避けられなかったとは」

「ステッキ職人さん、黒矢は最近一人も殺してないから、ずっと苦しんで気絶寸前なんですよ。そんな黒矢に暴力なんてヒドイッ！」

「なるほど、気絶寸前の苦しみですか。大した精神力です」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、俺の大切なナイフをどっとうしてくれるんですか？」

「それに、さっきまでの嘘泣きなんですか？私を騙すなんて」

「ナイフは弁償しますよ。あと、さっきまでの嘘泣きです。貴方達を油断させるためでした」

「へー、ちなみにさっきのナイフは『刹那を生きる』で買った物ですよ」

「え、そうなのか？」

「黒矢は黙ってて！」

バキッ！

「それに、さっき黒矢がステッキ職人さんのステッキで突き飛ばされた時に、私のビーカーとスポイトが壊れてしまいました。それも弁償して下さい」

「それは嘘で」

「私を疑うなんて酷い！泣きそうです！」

「……………分かりました。全部あの店で買ってきます」

「ありがとうございます。流石はステッキ職人さん」

「…はあ」

「あの娘さん、いい性格してますね。まあ、あれくらいじゃないと黒矢君の相棒なんて務まりませんよね。それに、あの時本気で泣いてしまったこともバレずに済みましたし。結果オーライ、でしょ」

鬼の料理人（後書き）

登場人物紹介

黒矢（約二百歳、殺人鬼族）

二百年前の戦争のとき、銀次と正当防衛以外でヒトを殺さない約束して、今だに約束を守っている真面目なヒト。色々あって伶俐と出会い、行動を共にしている。ヒトを殺していないため、常に苦しみに耐えている。そのせいですぐ気絶するし、足元がおぼつかないからよくこける。常連客からはドジすぎる可哀相なやつだと思われる。

伶俐（約二百五十歳、吸血鬼族）

黒矢と行動を共にしているマッドサイエンティスト。実験と研究が一番の楽しみで、興味があるものを見つけると我を忘れてしまう。科学と化学と料理を同じものだと考えている。生涯をかけて叶えたい野望があるらしい。実はかなりの箱入り娘で、黒矢に教えてもらうまで、吸血鬼なのに血の吸い方を知らなくて、血は常に用意されている飲み物だと思っていた。

刹那を生きる！（前書き）

ああ、あの二人を登場させてしまった……

刹那を生きる！

「はあ、ここにはもう来ることはないと思っていましたが、仕方がありませんね。それにしても武器屋の名が『刹那を生きる』だなんて、趣味悪いですね」

キインツキインツ

「おっと、危ないです。そーいえばこの店員さんは店名以上におかしなヒト達でしたね」

「僕達」

「私達の」

「鉄製紙飛行機を」

「避けるとは」

「お前、ただ」

「者じゃあ」

「無いな」

「それに、私のネーミングセンスを馬鹿にしゃがって。許さねえ。なっ、優平」

「いや、正直俺もあのネーミングセンスはどうかと思ってた」

「あの、すみません。武器を買いに来たんですけど」

「なんだって、じゃ」

「あ、あれだな。」

「いらっしや」

「いませー」

「二百年経ってもその喋り方は変わりませんね。ずっとそうなので
すか？」

「いや、二人だけの時は普通に話しますけど、なあ、刹那？」

「まあね。つーか、あんな喋り方で一日中話してたら疲れちゃうよ。
てゆうーかあ」

「あなたは誰で」

「したっけ？」

「いえ、以前素敵なステッキを購入した者です」

「あ、私このヒト覚えてる。駄洒落センスが絶望的なヒトだ！」

「なるほど。思い出した。俺達のこと、『あくまで悪魔なんですな、

でも飽くわ』とか意味不明な言葉を口走ってました」

「あの一、そのことは忘れて下さい。といつかまさか二百年も覚えてるなんて」

「まあ、僕は悪魔だし」

「しだまくあはしたわ、あま」

「この世界はほとんどの種族がヒトって言われてるのに、僕達悪魔だけが魔族とか言われてるし」

「全く酷いよね。私達以外の全ての悪魔がヒトを滅ぼそうとしているといえど、これは明らかに人種差別だわ！」

「あの一、武器を」

「うるさいな、」

「黙ってなよ老人」

「あんたに必要な物なら」

「レジのところを置いて」

「てあるよ、あんたは」

「人間の中では最強っ」

「ぼいし、特別大サービ」

「スしてやんよ。それに」

「死なねー奴と取引して」

「も意味ねーし、私は若い」

「魂が好みだしな」

「では、頂いておきますけど、やっぱり貴方達は魂とか食べるのですか？」

「超食べますよ。それはそれはこの星の住人の半分くらいは」

「なんですと！」

「いやいやジョークだったの。あたいらは温泉饅頭とか食って生きてるよ」

「魂とか汚そうだし」

「じゃ、元気だな」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん」

「素敵ステッキ職人さん」

「はい。それではまた、優平さん、刹那さん」

「いやはや、三十年分くらい疲れが一気に溜まりました。もうここには来たくないです。しかし、私、いや、儂、やつぱ、私が買うおとしていた物が既に揃えられているとは、悪魔とは本当に恐ろしい生き物ですね。まあ、あの二人が特別なだけかもしれないが」

刹那を生きる！（後書き）

登場人物紹介

刹那（年齢不明、悪魔族）

優平とともに武器職人をやっている。ネーミングセンスは絶望的。ヒトと仲良く（？）するため他の悪魔から敵視されているが、魔族の王の弱みを握っているため、魔族で刹那に逆らえる者は優平しかない。ブラックジョークを愛している。

空霧優平（年齢不明、悪魔族）

刹那と行動を共にしている武器職人。名前の通り優しい（？）性格をしており、気が向いたときは、客を殺そうとする刹那を宥めたりする。刹那のことを大切に思っているが、ネーミングセンスの悪さにはうんざりしている。

マッドサイエンティストって響きはカッコイイツね

「買ってきましたよ。ナイフとビールカーとスポイト」

「あ、生きて帰ってきたんだ。ステキステッキさん」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、無事でしたか」

「ええ、かなり疲れましたが。取り合えず、約束の品です」

「伶俐の分まで買ってきてくださったんですね。あいつが言ったことはうそな」

バキッ

「とにかく素敵ステッキジーさん、ありがとう。あの店の製品なら溶ける心配もないし」

「溶ける？ええと、貴女は料理をしようとしているのですよね？」

「そうですねど何か？」

「いえ、私、いや、我、いや、私には意見はありません」

「その喋り方、さてはまだ一人称を決めてませんね。そんなあなたにこれ、『一人称決まるそば』今命名」

「いつの間に作ったんですか！というよりその料理、食べれる物な
んですか？」

「もちろん、さあさあ遠慮せずに」

「いえ、慎んで辞退、ぐわっ、あぐっ、ぐえっ、ごくくん」

「あーあ、飲み込んだじゃった」

「……………」

「あの一、大丈夫？」

「ふむ、大丈夫ですよ。これしきのことでは我輩に異常がでることは
ありません。しかし貴女、レディが暴力を振るうものではありません
。余は悲しいです」

「我輩に余、か。ふむふむ。そういえば黒矢に食べさせた時もこん
な感じだったような。完成品にはまだまだ遠いようなね」

「黒矢君にも食べさせたのですか、可哀相に。もしかして、黒矢君
がすぐ気絶する理由の一つに、貴女の料理を普段から食べているこ
とが挙げられるのでは？」

「……………いえ、そんなことはありませんよ？」

「はあ、黒矢君も大変そうですね。しかし、殺人鬼の相棒など、貴
女のような良い意味でも悪い意味でも意志や意思が強い方でなけれ
ば務まりませんね」

「どづいづことですか？」

「要するに、これからも黒矢君の面倒をみてあげてください、という事です」

「うーん、面倒をみてもらってるのは私の方だと思いますけど」

「それでも貴女は黒矢君の支えになっているはずです。黒矢君の貴女を見るときの目を見ればわかりますよ」

「えっ、どんな感じなんですか？」

「僕の口からは言えません」

「そんなっ、教えてくださいよ。正直、最近変な料理とか食べさせ過ぎだなんて自覚はあって、内心黒矢に嫌われてないか不安に思い始めているんですよ」

「そんなに不安に思うのなら、変な料理なんて作らなければいいのでは？」

「それは出来ません。私には絶対にやらなければならぬことがあります。そのためにはたくさんの実験データが必要なんです」

「やらなければならぬこと、か。殺人鬼が殺しをしなかった場合に伴う苦しみを消すこと、ですね？」

「何故それを？」

「伊達に長生きしていません。まあ、難しいことでしょうが頑張っ

てくださいね、伶俐さん。それに、そこまで自分のために頑張ってくれる子がいて羨ましいです、気絶したふりをしてる黒矢君」

「えっ！聞いてたの！黒矢！」

「ギクツ、いや、そんなこと、ないよ？」

「さっ、さっきのは冗談だからね！私が研究するのは、あくまで私自身の趣味！勘違いしないでよねっ！」

「ほほえましい光景です。しかし、ツンデレという言葉が流行ってから、勘違いするな、等のセリフのかつこよさが微塵もなくなってしまうました。一体いつの間にか変わってしまったのでしょうか？」

マッドサイエンティストって響きはカッコイイっすね(後書き)

勘違いすんじゃないねえ

とか、僕が小さい頃見てた漫画かなんかで言ってるキャラがいた気がするけど、あれも「ツンデレ」ってカテゴライズされると格好悪くなりますね。

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ（前書き）

十一月六日は、お見合い記念日、又はアパート記念日です。

特に意味はありませんが。

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ

「はあー。優平くんには刹那さん、黒矢君には伶俐さんという相方がいますが、余には相方がいません。我にも相方が欲しいですね。どこかに僕のことを「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんかね？」

「その怪しいヒト、こんな森の中で何してんの？」

「「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんかね？」

「……………」

「「おじいちゃん」と

「お、おじいちゃん、こんな所で何してるの？」

「孫を探しているのですよ」

「孫、ですか。でも、少なくともこんな森の中にはいないと思いますよ」

「そんなことはありませんよ。貴女のような可愛らしい女の子に会えましたし」

「いやー、照れますね。褒めても何にも出ませんよ」

「うーむ、一つ頼みを聞いてもらえませんか？」

「頼み？ああ、森の出口へ案内してほしいとか？」

「いえ、単刀直入に言いますと、私の孫になつていただけませんか
！！」

「……………」

「孫に、なつていただけませんか？」

「……………」

「孫に、なつてほしいぜよ！」

「……………」

「孫に、なつてくれないかな？」

「……………嫌です」

「何故、何故断るのですか！」

「知らないヒトについていくなど親から厳しく言われておりますの
で」

「さつきはおじいちゃん、と呼んでくださったのに！」

「それは話を進めるために仕方なく、でした」

「そんなつ、こんな老人の心を弄ぶなんて、ヒドイッ！」

「このヒトと話すの疲れる。あのつ、森の出口はあちらですよ。早く出て行ってください！」

「は？ここはあの有名な『帰らずの森』ですよ。不老系の種族が自らの命を絶つために訪れるという。どうして貴女は帰り道を知っているのですか？」

「そ、それは……………」

「それは、この森の主である死神族だから。おかしいですね？死神族はあの戦争で滅びたはずなのに」

「何故それを？」

「おじいちゃんは物知りじいちゃんですから。なるほど、最初に私に話しかけたのは、私が自殺志願者かどうかを調べるためなんですね？」

「はい。死神族の役目は、自殺志願者の不老不死系の種族の方達の命を刈ることですから。あなたのような変人は管轄外です」

「一族がみんななくなつてからも、その仕事を続けてたんですね。仕事内容も辛い内容でしたでしょうに」

「辛くても、それが仕事ですから」

「辛いなら、やめてしまえ。私の孫になれば、飴ちゃんだってあげますよ」

「 飴ちゃん。ですか」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 しかし、一族の遺志を守るためにも……………」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 今までだって頑張ってきてたし……………」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 …………… 飴ちゃん」

「 飴ちゃんーん」

「 飴ちゃん」

「 飴ちゃんどうぞ」

「 いただきます」

「 ……………」

「 …………… パクッ」

「 ……………」

「 …………… しまったー！」

「あーあ、食べちゃった」

「そんなっ！ 飴ちゃんて釣るなんてっ！ なんてヒトだ！」

「おじいちゃんと呼びなさい」

「……………おじいちゃん」

「大きな声で！」

「おじいちゃん！」

「よし。後は、貴女の呼び名ですね。なんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「ええと、名前忘れしました。二百年も名前呼ばれてないし、仕方ないですね」

「じゃあ、我輩が命名しましょう。『おじいちゃんラブ子』は？」

「却下します」

「『じつちゃん好子』」

「却下」

「『グラントフマザ子』」

「死んでください」

「『真子』」

「まこ?」

「気に入りました?」

「……………孫だから真子ですか?」

「ギクツ、いや、そんなこと、ない、ですよ?」

「却下」

「ふむ、却下ですか。うん?そっだ、『却花』は?

「きゃっか?」

「なんか、花ってついてたら可愛いっぽくないでしょうか?」

「……………却下。いや、却花でいいです」

「じゃあ、改めまして。よろしく、却花ちゃん」

「「ちら」そ、お、おじい、ちゃん」

「>>>」

「おじいちゃん?」

「いや、いいものですね、孫というものは。生きててよかった」

「大袈裟です」

「まあ、出発するところまじょー」

「はい！」

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ（後書き）

登場人物紹介

却花（約三百歳、死神族）

千歳からが大人である死神族の中では、まだまだ子供だったため、二百年前の戦争のとき、森の奥に隠され、生き残った。それからずっと死神族の仕事を一人でこなしていたが、銀次に飴で釣られ、孫にされてしまった。孫と言いつつ、実は銀次より年上。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってき

男は自慢話をしているとき、脳ではドーパミンが分泌されているので、自分の意思では中々止められませんが、お酒の席などで自慢話をされても、暖かく見守ってあげましょう。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってます

「ちょっとちょっと、黒矢君、伶俐さん、聞いてくださいよ!」

「白銀の旅人さん、一体どうしたのですか?」

「あれ、伶俐さんは?」

「今実験中なんで地下に籠ってます」

「はあ、残念です。伶俐さんにも僕の可愛い孫を見せてもらいたかったのですが」

「可愛い孫?ああ、その死神の子ですか?」

「はい。可愛いでしょう。却花って名前です」

「……………却花です。よろしくお願いします」

「死神の生き残りか。……………あつ!ヤバイツ!伶俐が来る!逃げるんだ却花ちゃん!」

「それは何故ですか?」

「それはっ!いや、もう遅い」

「……………遅い?」

「し、に、が、み、ぞ、く。血液、採取、ヒヒヒ」

「ひゃあっ！やめてください」

「こんなところに死神族がいるなんて。良いデータがとれそうね。ジュルツ、おっと、よだれが」

「ちょっと！黒矢さん！おじいちゃん！助けて！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あの一、黒矢君」

「な、なんですか？」

「私の可愛い孫は大丈夫なんですか？」

「……………」

「大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫だと思いますよ。多分血とかを結構採取されるくらいで解放されると思います」

「それって、大丈夫の内に入るんですか？」

「た、多分」

「どうして却花さんは連れていかれたのですか？」

「死神族だからでしょう。怜悯は珍しい種族を見つけると、血を採取せずにいられない性格をしていますから」

「血を採りすぎたりはしませんよね？」

「ええ、百年前くらいだったらヤバかったですけど、今なら大丈夫です」

「百年前？」

「……俺の命のストックが二つ減るまで血を吸われました」

「……」

「いやー、流石にあのときは死ぬと思いましたよー。ははははは」

「……」

「つつても、二回も死んだんですけどね。ははは」

「……」

「……」

「……先に謝っておきます。ごめんなさい」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「それにしても、帰ってくるのが遅いですね？」

「……………」

「……………」

「本当にごめんなさい！」

「……………」

「本当にすみません！」

「……………」
貴方は謝らなくてもいいです。僕の可愛い孫、却花ちゃん
は、貴方に殺されたわけではなく、伶俐さんに殺されたのですから。
責任は伶俐さんにとってもらいます。」

「……………」

「……………」

「……………」

]

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守って

命とは、儚いものです。大切にしましょう。

先入観つてのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（前書き）

泣くということは、ストレス解消として、かなり効率が良いらしいです。

ストレスが溜まっている人は、泣きまくりましょう。

先入観つてのを完全に捨てられる人つて、実際にはいませんよね

「どうしてあのおとき助けしてくれなかったのですか!?!」

「いや、だって、伶俐さん、怖いですし……」

「私っ!孫なんですよね!」

「はい、可愛い可愛い孫ですよ」

「じゃあ、勇気をだして助けてくださいよ」

「敵討ちの準備はしていたんですが……」

「敵討ちなんてしてもらっても少しも嬉しくありませんよ!悲しむヒトが増えるだけです!」

「「悲しむヒトが増えるだけ」ですか、いいこと言いますねえ。感動しました。いつの間にかこんな良いセリフを言えるような子に育っていたんですね、おじいちゃんとしては嬉しいです」

「いやっ、いつの間にか、とか、会ってからまだ三日も経っていませんよ!」

「ああ、そうでしたね」

「とにかく、私は怒りました。もうおじいちゃんとは口を利いてあげません!」

「そ、そんなっ！」

「……………」

「あー、却花ちゃん？」

「……………」

「バーカバーカ！」

「……………」

「布団が吹っ飛んだ」

「……………」

「猫が寝転んだ」

「……………」

「隣の家に困いが出来たって、カツコイー！」

「……………」

「却花ちゃん、その服似合ってるね。孫にも衣装。てね！」

「……………」

「 飴ちゃん」

「……………（ぴくっ）」

「 飴ちゃん、あげるよっ…」

「……………（じゅるっ）」

「おじいちゃんのこと、許してくれるのなら飴ちゃんあげるんですけどね」

「……………」

「カウントダウンしますよ。五、四、三、二」

「いただきますー!」

「ふふふ、はい、どうぞ」

「（ぱくっ）……………あっ、しまった!」

「約束ですよ、我輩を許してください」

「 飴ちゃんて釣るなんて卑怯な。それが大人のすることですかっ!」

「約束は約束です。ふふふふふ、大人はみんなずる賢いんですよ」

「くっ、仕方ありません。おじいちゃんを許します。しかし……………」

「しかし?」

「こんな子供を飴ちゃんて釣る大人とか、普通に考えれば不審者に

しか見えませんよね」

「え？」

「しかも自分のことを「おじいちゃん」とか呼ばせてるし。警察に通報されたら即、牢屋行きですね」

「……………」

「私も悲しいです。こんな変態っぽい老人に無理矢理孫にされちゃって」

「……………」

「しかもいざという時に助けてくれない。冷たいヒトに」

「……………」

「こんな老人についていこうと考えたあの時の自分を殴ってやりたいです」

「そ、そんな」

「それに……………ってええ！泣いてるんですか！」

「泣、いて、なん、か、いま、せん。グスッ」

「いや、泣いてるでしょう？」

「却花、ちゃん。儂みた、いな、のと、一緒に、いたく、ない、の

なら、言って、くだ、さいよ。今まで、ありが、とっ、ごぞい、
ました。さよ、ならっ」

「え、ちょっと、待ってください！言いすぎましたっ。謝りますか
らっ。……ああ、行っちゃった。追い掛けないと」

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（後書き）

悲しい時に素直に泣けるって、いいことですね。

小さき策士

「おじいちゃん！待ってよー！」

「一人にしないでよー、私、泣いちゃうよー！」

「うつつ、グスツ、ひくっ」

「却花ちゃん！どうして泣いているのですか？」

「だって、おじいちゃんが、私をおいて行くから」

「でも、却花ちゃんが、儂みたいなの孫にされて嫌だみたいなことを……………」

「グスツ、そ、そんな、こと、ない、もんっ」

「なら、あれは儂の聞き間違えだったのですね。すみません、お詫びに飴ちゃんあげます」

「わーい、ありがとう。(ぱくっ)……………ちよろいな」

「うん？何か言いましたか？」

「うん。飴ちゃん美味しいなって言いました」

「そうですね、それは何よりです」

「(ニヤッ)」

「何故そんなに笑っているのですか？」

「いや、飴ちゃんがあまりにも美味しくて、幸せだなぁって思いました」

「そうですね、却花ちゃんが幸せなら、それでいいです」

「……………クスッ」

小さき策士（後書き）

子供は、大人が思っている以上に賢いです。

特に、親の様子を窺う能力は、大人以上かもしれません。気をつけましょう。

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（前書き）

動物は、親が受けたストレスを子が受け継ぐらしいですけど、親が万引きして恐ろしいめにあえば、万引きしない子が生まれてくるのでしょうか？

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね

「……………ふむ、却花ちゃん。僕が目を離していた隙に、何か無くなっていますか？」

「え？」

「たとえば、財布とか。入っているのはお金じゃなくて飴ちゃんですが」

「……………無いつ！私の飴ちゃんがつ！」

「やはりそうですか。この気配、百々目鬼、ですか」

「百々目鬼、って、何なんですか？」

「簡単に言つと、目がたくさん腕にある泥棒ですね。」

「なんか怖いですね。目がたくさんあるなんて」

「ふふふ、大丈夫です。百々目鬼には大きな弱点がありますからね。とにかく、あちらに逃げたようですので、追いましょー！」

「ここにいましたか、泥棒さん。その財布はこの子の物です。返しなさい」

「へっ、みふかつひゃか。ひはははない、ふはえ、ほほえきひーふ」

「おじいちゃん！このヒト私の飴ちゃん食べてる！」

「ふん、魔法、ですか。鬼族が魔法を使うなんて珍しい。お名前を教えてくださいませんか？」

「……………わはひほひっはすわわはひははいはほ。はあひひ、わはひほはまへはほしへらへなひば、ひるぼめひはらほひえへやほう。ひーぶ、は！」

「ふむふむ、ギルドでの名しか教えてくれませんか。シーフ、いかにも泥棒っぽい名前ですね。まさか、ギルドに登録した職業まで、泥棒なんじゃ、ないですよな？」

「ふん、ほのほーひま！ははひはめんはいははら、はぶすひすよふもはいのはっ！」

「ほう、それは素晴らしい自信です。その自信に免じて今回は見逃してあげます。しかし、次に、私の可愛い孫の持ち物に手を出したら、許しませんよ」

「ほー、ほーふるっへいふんら？」

「そのとき、貴女が私の孫になってくれない場合、捕まえて警察に

引き渡します。懸賞金、三千万ゴールドでしたね？」

「ほふひっへるは。ひゃはさひほり、おはへほははへをひひれほほ
っ」

「ギルドでの名は、シルバ、です。本名は、貴女が教えてくれたか
ら言いつつとごしませしょう。では」

「ひゃーは…」

「はっ」

「…………おじいちゃん、色々聞きたいことがあるんだけど、まず、
あのヒトは一体何者なんですか？」

「泥棒のシーフちゃんです。飴ちゃんをたくさん頬張ってたからっ
まく喋れていませんでしたね」

「なんでおじいちゃんは聞き取れたの？」

「それは、年の功ってやつですよ」

「……………」

「なにか不満があるのですか？」

「はい、私の飴ちゃんが！」

「それは、却花ちゃんが財布をちゃんと見はってなかったからでしょう。この世界は却花ちゃんが思っているほど甘くありません。自分の身は自分で守らないといけませんよ」

「……………はい。ごめんなさい。次から気をつけます」

「よろしい、では、気を取り直して、買い物にでも行きましょうか。飴ちゃん専門店、好きな飴ちゃんを五百ゴールド分までなら買ってあげますよ」

「えっ……………はいっ！！」

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（後書き）

結局、百々目鬼の弱点、『近くで玉葱を刻む』を使うことはありま
せんでした。残念。

雨の日、古傷が疼くとか言っけど、それには科学的な根拠があって、あ（略）

雨の日、古傷が疼くのは、副交感神経が優位になるから、らしいです。

また、働きすぎ等で交感神経が優位になっていると、疲れ等を感じにくくなります。だから、過労死というものが存在するのだと思います。

たまにはゆっくりくつろぐことも必要です。

雨の日、古傷が疼くとか言うけど、それには科学的な根拠があって、あ(略)

「はあ、雨、ですか。古傷が疼きますね」

「古傷？おじいちゃん、怪我したことあるの？」

「まあ、昔の戦争のときまではごく普通の人間でしたから。というか、却花ちゃん、儂に敬語を使わなくなりましたね」

「だって、孫がおじいちゃんに敬語で話すっておかしいでしょ？」

「それはそうですが……………」

「私が敬語を使わないっていうのは、敬意を持たなくなったってことじゃなく、親しみを持ったってことなんだよ」

「そうですか！それは素晴らしいです！」

「うん、だから、おじいちゃんの昔の話の続き、して」

「しかし、あの頃の話はあまりしたくないのですが……………」

「私、大好きなおじいちゃんのこと、知りたいのにな。駄目なの？」

「駄目なんかじゃありませんよっ！ええと、それは、二百年前の戦争のことでしたね……………」

「……………(にやり)」

「様々な種族が、自分が一番優れているとか主張し合って、世界中で戦いが起こりました。そして、世界は殺意でいっぱいになってしまったのです」

「はい、そういうことなら知ってるよ。森の中からでも様子は分かりました。」

「では、殺人鬼は殺意によって発生する。ということも知っていますか？」

「いえ……………じゃあ、もしかして、あの時に殺人鬼が世界中に現れたのは、戦争での殺意のせいなの？」

「はい。そしてその殺人鬼によってこの星の住人のほとんどが命を落としました。その中の一人が、僕の妻、でした。僕が考えるに、殺人鬼は、星にかけられた呪いみたいなものなんじゃないですかね。ヒトを殺さなくては生きていけず、殺すほどに強くなる」

「奥さん、殺されちゃったの？」

「ええ、それで僕は殺人鬼に復讐するために、悪魔に武器をもらいました。このステッキがそうです」

「そのステッキ、そんなに恐ろしい物だったの！」

「はい。それで、僕は殺人鬼を殺してまわりました。中には千以上の命を持つのもいて、大変でしたが」

「殺人鬼を殺すって、その頃からそんなに強かったんだ」

「いえ、最初から強かったわけではありません。あくまで殺人鬼と戦う過程で強くなっていったんです。それで、人間の限界を超えてしまい、年をとらなくなりました。輪廻から外れてしまったんですかね?」

「いえ、私は死神族なんで分かるけど、輪廻なんて存在してないよ。死んだら無になるだけ。おじいちゃんは多分、悪魔に何かされたんじゃない?」

「あつ！それは盲点でした。そういえば、あの店で武器を買って、寿命で死んだ方は誰もいませんね」

「それで、おじいちゃんはどうなったの?」

「ええ、えつと、殺人鬼を全滅させました」

「すごいっ！つまり、おじいちゃんは世界を救ったんだね!」

「……………嘘です」

「は?」

「僕がそんなこと出来るはずがないじゃないですか。殺人鬼を全滅させたのは黒矢君ですよ」

「え、ええ!」

「まあ、なんだかんだで今に至ります。以上!」

「ちょっと、どういこと!?!どこまでが本当なの?」

「……………うつかり、可愛い孫に昔の暗い話しをしてしまいました。
いけませんね、黒矢君のこともうつかり言ってしまうましたし、今
度、謝っておかなければ」

雨の日、古傷が疼くとか言っけど、それには科学的な根拠があって、あ（略）

さかなさかなさかなー

魚を食べると、頭が良くなりますよ。

いやよいやよは、つまりいや、ってことです

「あー、却花ちゃん。ここは一体どこでしょう？」

「どっつて言われても、最近まで森から出たことのなかった私には分かるわけないよ」

「迷子になってしまいましたか。僕の場合は迷老人ですけどね」

「おじいちゃん、その歳になって道に迷うとか、恥ずかしくないの？」

「それを言うなら、生きてきた年数は却花ちゃんの方が長いですよ」

「こういうときだけ歳のこと言わないでよ！そもそも、人間と死神じゃあ歳の感覚が違うの。セミからすれば十年生きてれば相当な老人、いや、老蝉でも、人間の十歳って、まだまだ子供じゃないですか！」

「……まあ、そうですね、そこまで必死にならなくても」

「……おっと、冷静さを欠いていました。うっかりですね」

「しかし却花ちゃん、敬語になってますよ」

「おっと、うっかりしてたぜ！」

「……………」

「うっかりしてたっす!」

「……………」

「うっかり、うっかり。てへっ!」

「……………げっ」

「げっ、とはなんですか!そもそも、私は今まで敬語以外で話したことがないんですから、多少おかしくても仕方ないじゃないですか!」

「は、はい。そうですね。まあ、無理せず気長に頑張ってください」

「うん。ありがと……………って、そういうえば、今道に迷ってるんですよ。全然解決してないじゃないですか!」

「おっと、忘れていました。ですが、どうやらなんとかかなりそうですよ」

「どうして?」

「あそこに大きな屋敷があります。その家主に道を聞きましょう」

「あの屋敷ですか。でも、こんな場所に屋敷を建てるなんて、怪しくないですか?」

「あれ、却花ちゃん。もしかして怖いんですか。死神族なのに?」

「そんなことないもん!ただ、安全を考慮してですね……………」

「却花ちゃん。今のセリフもう一回」

「安全を」

「違う、その前」

「そんなことない、です」

「さっきと違うー!」

「ひっ、怒鳴らないでよ」

「すみません。つい」

「全く、気をつけてよ。で、屋敷に入るのなら早くはいりましょ

う」

「…… 飴ちゃん」

「はい?」

「さっき僕が言わせようとしたセリフ、言ったら飴ちゃんあげます」

「そんなこと言えませんよ!……(じゅるっ)」

「飴ちゃん」

「くっ、なんて卑怯な」

「 飴ちゃん! 」

「 そ、そんな、こと 」

「 飴ちゃん 」

「 そんなことないもん! 」

「 よし。 飴ちゃんどうぞ 」

「 なんてヒトだ……(ぽくっ) 」

「 それにしても、 却花ちゃん 」

「 なんねすか? 」

「 知らないヒトに 飴ちゃん貰っても、 ついて行ったりしてはいけませんよ。 世の中にはどんな危ないヒトがいるかわかりませんからね 」

「 …………… 」

いやよいやよは、つまりいや、ってことです（後書き）

ヤバイ人は自分がヤバイって気づかないものです

辺りに何も無い場所にそびえ立つ怪しい屋敷

「もしもし！誰かいませんか！」

「おじいちゃん、まず、言わせてもらいたいことがあるんだけど、いい？」

「何ですか？」

「普通、ヒトの家に入るときは相手の確認をとってからじゃないと」

「今、そうしてますけど」

「だから、家に入る前！勝手に入ったら不法侵入だよ！」

「まあ、普通はそうですね。でも、どうやらここは普通ではないようです」

「それって……」

「この気配、グールですね。それも、二、三十はいます」

「グールって？」

「簡単に言えばヒトを食べる鬼です。食人鬼とも呼ばれていますね」

「え、それってやばくないですか？」

「やばいです。流石にグールに食べられたら死んじゃいますし」

「なんとかしてよ、おじいちゃん」

「仕方がないですね。じゃあ、五秒ほど目を閉じていてください」

「う、うん。いーち、にーい、さーん、しーい、じー」

「はい、なんとかになりました」

「えっ?」

「全員、埋めておきましたよ。儂が若い頃のグールというものは、もっと強かったんですが、全く、最近の若い者は、情けない」

「おじいちゃん、強いんだね。見直したよ」

「そうですか、いやあ、照れますね」

「…………でも、道に迷っているという問題は、少しも解決してないよ」

「……………そうでした」

辺りに何も無い場所にそびえ立つ怪しい屋敷（後書き）

登場人物紹介

グール達（年齢不明、食人鬼族）

屋敷を建て、ひっそりと、必要最低限の食事をして慎ましく暮らしていたが、突然不法侵入してきた老人に襲われてしまった。子供を庇うため、必死に戦った大人達から埋められ、逃げようとしていた子供達も皆埋められてしまった。

人生、常に迷路（前書き）

さんーぼすすんでにほさーがるー

人生、常に迷路

「却花ちゃん。ようやく街、いや、昔のようなものを見つけましたよ」

「ええと、あつちですか？」

「違います。そっちには何もありませんよ」

「でも、気配が……」

「そうでしたね、死神族は不老系の種族の気配で見つけられる、でしたね」

「うん、よく知ってるね」

「伊達に長生きしてませんよ。しかし、その気配がどの種族かはわからないんですよ？」

「一度会ったことがある種族だったら分かるんだけど、まあ、今回はわかりませんが」

「ふむ、なるほど。じゃあ、その気配の持ち主には会わない方がいいでしょう」

「何故、ですか？」

「一概には言えませんが、死神の世話になる者がいなくて、吸血鬼でもなく、殺人鬼でもない種族なんて、僕は一つしか知りません」

「それって?」

「悪魔、ですね。その気配に、このステッキと似た感じがしませんか?」

「……いえ、そんなことはないけど?」

「え?」

「……」

「……」

「……」

「……」

「おじいちゃん、あんなにカッコつけて前フリしておいて、ハズレですか?」

「……」

「聞いてます?」

「……魔法を使います」

「えっ?」

「ワープします。街に帰りましょう」

「は？そんなことが出来るなら最初から……」

「ワープしますっ！」

「え、ちょ、うわあ！」

「ぎゃははははは。久しぶりに強い奴の気配がしたが、ここ、だよな？」

「いない、な。この魔力の痕跡。ワープ、したのか？」

「折角楽しいバトルが出来ると思ったのに、残念だぜ。ひやはははははは」

「この、魔王まおちゃんと戦う機会を逃すなんて、可哀相な奴らだ。しはははははははは」

「あれ、魔王まお君だっけ？やばっ、自分の性別すら忘れてら！ふっふっはははははは！傑作傑作」

「まあいい、また、会う機会はあるだろう！人間族と死神族のコンビなんて、そーそーいないからな！てきやてきやてきやてきや」

「……………てきやてきやは、ねーな」

いい趣味してるね、って、必ずしも褒めてるわけじゃないんですね(前書き)

知り合いに「いい趣味してるね」って言われて、内心喜んでたら、あとからそれは皮肉の意味だと教えられました。

寝るときに曜日に合わせて鬼の面を着けることの、何が悪いというんだっ！

いい趣味してるね、って、必ずしも褒めてるわけじゃないんですね

「おじいちゃん、これは一体どういづこと？」

「これ、とは？」

「ワープ出来るのなら最初からしてくださいよ！」

「すみません。でも、ちょっとした、理由がありましたね」

「理由？」

「実は、魔法を使う度に寿命が削られていくのです」

「そんな。あの、何も知らずにあんなこと言って、ごめん」

「謝らなくてもいいのですよ、却花ちゃんは魔法のことを知らない
ようですから」

「いえ、少しだけなら聞いたことがあります。確か、魔力を使って
凄いことをするって」

「……概ね正解です」

「でも、ワープの魔法って、魔法の専門家のエルフ族でも、使える
ヒトはほとんどいないらしいですけど？」

「いえいえ、あんなの簡単なものです。なにせ寿命を犠牲にしてま
すからね」

「寿命……あれ、おじいちゃんって、二百年以上生きてるんだよね？」

「そうですね？」

「よくよく考えると、おじいちゃんは不老だし、寿命とか関係ないよね。というか、寿命云々は嘘？」

「ぎ、ぎくっ！」

「まさか、道に迷って困っている私を見て、楽しんでいたってわけじゃ、ないよね？」

「ぎくぎくっ！」

「怒るよ」

「……」

「怒ったよ」

「……」

「私を騙すなんて、許さない。謝っても許さないから！」

「……」

「何か言いなさいよ……」

「 飴ちゃん」

「 えっ? 」

「 飴ちゃん」

「 あっ、飴ちゃんなんか貰ったって、許さないから! 」

「 そうですか、それは残念です。この飴ちゃんは儂が食べましょう」

「 くっ、す、ストップ! 」

「 何ですか? 」

「 つ、もう二度と私を騙したりしないなら、その飴ちゃんを許してあげます」

「 おお、なんと優しい。では、飴ちゃんをどうぞ」

「 (くっ) ……」

「 これにて一件落着。めでたしめでたし、ですね」

どんなに楽しいことでも、飽きはやってくる

「はあ、却花ちゃん」

「なに?」

「旅って、言うだけなら楽しそうに聞こえますが、実際にやってみると、暇ですね」

「ですね。一日中歩いてるだけの日もあるし、野宿は面倒だし」

「今思えば、却花ちゃんが孫になってくれていなかったら、さぞ辛かったでしょうね」

「本とかに登場する旅人とかも、こんな感じだったのかな?」

「本に登場するような旅人は、何か目的があって旅をしているのだから、そんなことはないでしょう」

「そういえば、おじいちゃんは何か目的を持ってなかったの?」

「目的、ですか。そういえば、孫を見つけるといいう目的がありました!」

「……………それ、もう叶ってるよ。他にないの?」

「うーん、あっ、ありましたよ!」

「何なの?」

「世界を救う！」

「……………どうやって？」

「この前、殺人鬼について話したでしょう。殺人鬼が増え過ぎないように、間引きするんですよ」

「……………」

「どうしたのですか？」

「いや、おじいちゃんのことだからふざけて言ってるんだと思ってたから、びつくりした」

「失礼な。僕は常に真剣に生きていますよ」

「でも、孫を見つけることと世界を救うことを同列に並べるなんて……………」

「ふざけたことを言わないでください！同列になんて並べるわけがないでしょう！」

「そ、そうですね」

「世界なんかと孫を一緒にしないでください。可愛い孫と比べれば、世界なんてゴミ同然です！！」

「……………まあ、そうなるか。おじいちゃんだもんね」

「はい、ですから気をつけてくださいね。もし、この旅で却花ちゃんに万が一のことがあれば、憂さ晴らしに世界を滅ぼすかもしれないから」

「せ、世界の命運が私にかかっているの？」

「はい、そうです。いまさら気づいたのですか。だから、日々、安全に気をつけて生活してくださいね」

「……………はい」

どんなに楽しいことでも、飽きはやってくる（後書き）

最近、過保護すぎる親が増えすぎて、世の中が心配です。

それが子供の為になるって、本当に思ってるのでしょうか？

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち

反語表現

学校での薬物乱用についての授業に効果はあるのだろうか、いや、無い。

実際、薬物乱用について授業をした学校よりも、していない学校の方が、将来薬物乱用をする可能性が少ないというデータがあるそうです。

人間、やってはいけないと言われるとやりたくなくなってしまふものですからね。

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち
「てっ、てっ、てっ、てっ、てっ」

「……おじいちゃん、どうしたの？」

「殺人鬼のテーマです。近くに殺人鬼がいますよ。気をつけてくだ
さい」

「えっ！そんな、いきなり言われても」

ザクッ

「殺人鬼、とつたどー！！」

「ぐっ、素敵なステッキに、刺されてる。なんてじーさんだよ」

「おじいちゃん、このヒト、見た目は女の子だよ。本当に殺人鬼な
のっー！！」

「ああっ！なんだてめえ。あたいのことをなめてんのかよっ！これ
でも立派な八十歳だったのー！！」

ザクッ、グサッ

「僕の可愛い孫に、乱暴な物言いしないでください」

「はんつ、余裕ぶつた態度しやがって。これでもあたいは八十年殺人鬼やってんだぞつ。お前みたいな人間族、赤子の手を捻るように殺せるぜつ！」

「では、たかが人間族のステッキごときに串刺しにされている、今の状況はなんなのでしょうね」

「う、うるせーな。とにかく、放せよ！放してくれりゃあ命だけは見逃してやんよっ！」

「はあ、この状態でその態度、これはある意味感心しますが、暴れられては面倒です。魔法を使いましょう。ええと、コホン。ストツプ！」

「か、体が動かねえ。くそ、なにをした！」

「貴女の顔以外の動きを止めました。これで貴女は抵抗できませんね。ぐへへ」

「なつ、何をする気だ！変態じじい！くっ、来るな！」

「変態じじいだとは失礼な。僕は紳士かつ旅人なんですよ。僕はただ、貴女に提案をしようとしているだけです」

「……………提案だと？」

「単純に言うと、貴女、僕の孫になりませんか？そうすれば、命だけは助けてあげますよ」

「……………ふざけるなよ。殺人鬼を孫になんて出来るはずねえだろ！お前は自分の命が惜しくないのかよ！」

「自分の命は惜しいですよ。当たり前じゃないですか。まあ、孫と自分の命だったら、孫をとりますが。とにかく、返事はイエスですか、ノーですか？」

「……………ノーだ」

「そうですね、残念です。では、諦めましょう。却花ちゃん、行きますよ」

「え、う、うん」

「ちょっと待てよ！止めはささなくていいのかよっ！っーか、行くなら行くで魔法解いてからにしるよっ！おい、おーい！」

「おっと、そうでしたね。飴ちゃんをあげましょう。魔法は時間が経ったら解けます。それまで、飴ちゃんでもなめててください」

「ぐっ、へへー、ふはへへんひゃへーほ！」

「では、あらためて、行きましょう。却花ちゃん」

「うん……………（じゅるっ）」

「ひよっ、ひよっほはれるー、ほーい！」

「おじいちゃん。さっきの殺人鬼、止めをささなくていいの？」

「止めをさすところ、見たかったのですか？」

「違う、けど、あの子を生かしてたら、知らない誰かが殺されるかもしれないし」

「僕も最初はそうしようとしていましたが。却花ちゃんは気づかなかったのですか？」

「気づくって？」

「あの殺人鬼、僕が魔法をかけるまでの間に、却花ちゃんを殺すチャンスが何度かあったのです。でも、そうしませんでした」

「それって……」

「普通、殺人鬼が八十年も生きてたら、殺す相手を選ぶ理性なんて残っていないものなんです。その心の強さに免じて見逃してあげました。それに……」

「それに？」

「随分と可愛らしい性格をしていました。孫候補として、将来に期待したいところですね」

「……………」

「そうだ、却花ちゃん。ポケットの中に異変がありませんか？」

「ポケット？……………あつ、飴ちゃんが、無い！もしかして、さっきの飴ちゃんって」

「その通りです」

「な、なんてことをするんですかっ！」

「あの殺人鬼に、命を見逃して貰ったのですから、相応な代償ですよ」

「そっか、私、相手次第では死んでたんだ」

「いえ、死にませんよ」

「は？」

「僕は出会ったヒト全てに、却花ちゃんに危害を加えようとすると体が腐る呪いをかけていますからね」

「……………」

「ちなみに、呪いというのは、魔法の残酷バージョンみたいなもので……………」

.....

テレビに影響されて事件を起こす人って、テレビに影響されなくてもそのうち

登場人物紹介

女の子？（八十歳、殺人鬼）

乱暴な言葉遣いをする殺人鬼の女の子。変態老人に出合い頭にステッキで串刺しにされたあげく、時間を止める魔法で身動きをとれなくされ、孫にならないかと提案される。あげく、孫になることを断ると無理矢理口に異物をねじ込まれ、そのまま放置された。

てっ、天啓が！（前書き）

閃いたっ！！

てっ、天啓が！

「そういえばおじいちゃん、前に殺人鬼の子を孫にしようとしてたよね？」

「そうですね？」

「もしかして、孫の数を増やそうとか考えてる？」

「もちろん。いずれは、たくさんの孫を引き連れて、世界中を旅したいものです」

「……………やっぱり」

「何か、問題でもあるのですか？」

「あるよ。あのね、ただでさえ老人が子供を連れて旅してるっていうのは変だし、そのうえ連れてる子供の数が増えたら、はたから見るとかなり怪しく見えるよ」

「なに、それは盲点でした。なんとということでしょう。こうなったら、どこかに屋敷を建てて、そこに孫達と暮らすための楽園を作りましょうか？」

「それは困るよ。なんだかんだで、私はこの旅を楽しんでるし、そんな面白いのなさそうな生活になるのは、絶対に嫌だよ」

「し、しかし……………」

「それに、私、おじいちゃんと二人きりでの旅がいいの。他の子が増えたら、おじいちゃんに構ってもらえなくなるじゃない！」

「嬉しいことを言ってくれるじゃありませんか！分かりました。却花ちゃんが寿命で亡くなるまでは、他に孫をつくりません。二人での旅を楽しみましょう！」

「……………ふう、これで飴ちゃんの取り分を独占できる」

「何か言いましたか？」

「おじいちゃんを独り占めできて、嬉しいって言ったんだよ！」

大切なのは、金かね？

「おじいちゃん。三時のおやつの時間になったよ。飴ちゃんちょうだい」

「えっ、ああ、はい……」

「うん？早くちょうだいよ」

「いや、その、あの……」

「まさか、な、無い、とか？」

「ははははは、は」

「そんなっ、楽しみにしてたのっ！」

「……………」

「どうして飴ちゃんが切れるまでに新しいの買っておかないのっ？」

「いや、お金がなくて……」

「お、お金？」

「よくよく考えれば僕達、働いていませんし。お金が尽きるのはむしろ当然といえましょっつ！」

「威張らないでよ」

「はい。すみません」

「でも、どうやってお金を稼ぐの?……このままじゃ、明日からも飴ちゃんが無い生活をしないといけなくなっちゃうよ」

「また、賞金首でも狩るとしますか……」

「いや、もっと平和的に稼げないの?」

「むう、平和的な稼ぎ方、ですか。……思えば、そんな稼ぎ方したことありませんね。世の中の一般的な方々は、どうやって稼いでいるのでしょうか?」

「……はあ、こんな大人にならないよう、気をつけないと……って、あった!平和的な稼ぎ方!」

「おお、それは一体何なのでしょう?」

「この紙見て!」

「……闘技大会の案内ですね」

「優勝賞金、一千万ゴールドだって。一千万って凄いなだね。飴ちゃんいっぱい買えるよね?」

「まあ、十万個くらいは買えますね。……しかし、これは平和的な稼ぎ方なのでしょうか?」

「おじいちゃん、何言ってるの。この世の中に、平和なんてあるわ

けないじゃない！こんなのとつと優勝して、一千万ゴールド手に入れてよー！！」

「……………」

「どつしたの？……もしかして、ドドつてんの？」

「……却花ちゃん、僕は怒りました」

「はっ？」

「どつやら、甘やかし過ぎていたようです。少しは苦勞も知ってもらわなければいけませんよね」

「……………ま、まさか」

「却花ちゃんにも、出場してもらいます。死神族なのですから、多少は戦えますよね？」

「え、う、うん……………」

「よし、そうと決まればとつと受付に行きましょうー！！」

「う、うん」

「そうだつ、あのセリフを言っておかないと……………」

「あのセリフ？」

「ふっ、決勝戦で、待ってるでゴンスー！！」

「……(シッコ)は、放棄しよう」

大切なのは、金かね？（後書き）

死亡フラグ紹介

「……俺、優勝したら、あいつに告白するんだ」

ファンタジーには闘技場が必須！（前書き）

なんか、素晴らしい笑い方、ありませんかね？

「ぎゃははははは」「シハシハシハシハ」に匹敵するような……

ファンタジーには闘技場が必須！

「さあさあさあさあ始まりましたよ。今年も世界中が熱くなる闘技大会。記念すべき一回戦です。赤コーナー、さすらいの料理人。人間族の、クックさんだ！この戦いで、いかに敵を料理するのか目が離せないぜつ。……あれ、今、上手いこと言ったよな。言ったよな？」

「おう、俺が料理人のクック様だぜ。よろしくよろしくよろしくな
あ、嬢ちゃん？」

「……うぎ、戦う相手も司会のおっさんも、両方うぎっ」

「続きまして青コーナー。なんと絶滅したと思われていた、死神族の却花ちゃんだ。すごいぞすごいぞすごいぞすぎるぞつ。その鎌で、一体いくつの命を葬り去ったというのだっ！」

「……………」

「ルールはただ一つ、相手を殺さずに気絶、又は降参させること。
……それでは、バトルスタートだっ！」

「お嬢ちゃん、先に言っておくけど、俺はどんな相手でも一切手加減しなクブオワツ！」

「ふふつ、戦いはもう始まっているんですよ。なにペラペラ喋ってるんですか？……………って、聞こえてないですね。もう気絶してる。」

情けなっ！……………くすっ」

「一回戦は、却花ちゃんの圧勝ですか。しかし、却花ちゃん、容赦無い性格していますね。……………この調子なら、二回戦の相手が儂でさえなければ、そこそこ勝ち残れたのでしょうね。……………全く、世の中とは、思い通りにいかないものです。……………可哀相に」

ファンタジーには闘技場が必須！（後書き）

登場人物紹介

クック（四十五歳、人間族）

包丁を使わせれば右に出るものはほとんどいない。でも、闘技大会では相手を殺すことが禁止されているため、包丁の代わりにフライパンを持参してきた。だが、それを使う間もなく死神族の少女に鎌で殴られ、気絶させられた。

老若男女、容赦しない。男女平等、若い者もお年寄りも、みんな平等さ（前書き

そうだった！

いいアイデアを思い付いたぞ！

読者にストレスを与えまくるミステリー小説！

これはいい、素晴らしい

年末までには完成させてやるぞっ！

老若男女、容赦しない。男女平等、若い者もお年寄りも、みんな平等さ

「厳しい一回戦を勝ち抜いてきた、強者達の集まる、神聖なる二回戦。……………これはなんて、悲劇。運命の悪戯か。赤コーナー、死神族の却花ちゃん。青コーナー、人間族の、銀次さん。なんとこの二人は、師弟関係、ではなくではなく、おじいちゃんと孫の関係なのだ。でも、人間族の孫が死神族とか、おかしくね。おかしいよ、おかしいよな？……………まあ、とりあえず、バトルスタート」

「ふ、可愛い孫だからって、容赦しませんよ」

「こちらこそ。でも、おじいちゃん、「決勝で会うザマス」みたいなこと言ってたくせに、二回せつ」

「どうしたんですか却花ちゃん。なんだか苦しそうですね？……………安心してください。その苦しみは、一秒ごとに増していき、一分が経つ頃には、全身が引き裂かれるような痛みを感じるだけです」

「そ、んな。魔法、なんて、卑怯、な」

「卑怯？戦いに卑怯もなにもありませんよ。どうします？……………早く降参しないと大変なことになりますよ。……………いーち、にーい、さーん……………」

「降参！降参しますっ！」

「……おじいちゃんが、まさかあそこまで陰湿な戦い方するとは思わなかったよ」

「まあ、これで却花ちゃんも戦いの厳しさを知れたでしょう？」

「……うん」

「それだけでも、この大会に出た価値があります」

「……それでさ、おじいちゃん、優勝するつもりなの？」

「もちろんです。しかし、決勝戦は苦戦することになるかもしれないせん」

「おじいちゃんが、苦戦？」

「ええ、なんか、魔王が出場しているらしいです」

「まっ、魔王！」

「ええ、恐ろしいことです。しかし、久しぶりに本気が出せそうですねえ。少し、テンションが上がってきました。若者風に言つと、アゲアゲってやつですかね？」

「……おじいちゃん、無理して若作りするの、やめて……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090x/>

銀の放浪老人

2011年11月21日17時05分発行